

AA 研共同利用・共同研究課題

「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

平成 25 年度第 3 回研究会(通算第 9 回目)

日時: 平成 26 年 2 月 7 日(金) 午後 1 時～午後 6 時, 2 月 8 日(土) 午前 10 時～午後 4 時

場所: 第 1 日…AA 研マルチメディア会議室(304), 第 2 日…本郷サテライト 7F 会議室

■研究会プログラム

1 日目

草稿合評会第 1 セッション

【草稿 1】津田浩司 (AA 研共同研究員, 東京大学)

「インドネシアの国家英雄、ジョン・リー—幾重にも本質化された語りを解きほぐす試み」

【草稿 2】玉置充子 (AA 研共同研究員, 拓殖大学)

「華人はタイに「同化」したのか?—ある「華人廟」からの問い」

【草稿 3】伏木香織 (AA 研共同研究員, 大正大学)

「シンガポールのハングリー・ゴースト・フェスティバルとスペクタクル化する儀礼—立ち現れる「華人」のイメージとその内実」

話題提供

【報告】ファジャール・イブヌ・トゥフアイル (AA 研外国人研究員)

“Figure of the Chinese and Urban Riots in Indonesia, 1970s-1990s”

2 日目

草稿合評会第 2 セッション

【草稿 4】北村由美 (AA 研共同研究員, 京都大学)

「「西」への道—オランダにおけるインドネシア出身華人の軌跡」

【草稿 5】櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 育英短期大学)

「甘いかおりと美しい記憶—マレーシア華人のコピティアムをめぐるノスタルジアについて」

【草稿 6】横田祥子 (AA 研共同研究員, 滋賀県立大学)

「トランスナショナルな家族福祉の保持—インドネシア華人の国際結婚を通じた家族の戦略」

草稿合評会第3セッション

【草稿7】市川哲（AA研共同研究員，立教大学）

「パプアニューギニア華人」とは誰か？—複合的な対面状況におけるサブ・エスニック・アイデンティティの認定」

【草稿8】黄蘊（AA研共同研究員，関西学院大学）

「上座仏教を實踐するマレーシア人仏教徒、それとも「華人」」

平成23年度以来3年間にわたって開催してきた共同研究会の締めくくり(通算第9回目)として、草稿合評会を行った。各共同研究員には、通算第7回目までにそれぞれ話題提供(1年目)およびブラッシュアップ報告(2年目)をお願いし、また通算第8回目には改めて本共同研究会の趣旨を確認した上で、草稿の執筆に取り掛かってもらっていた。今回の研究会で合評対象となったのは、こうしたプロセスを経て提出された上記8本の草稿である。なお、今回は学務のため出席が叶わなかった奈倉京子氏(AA研共同研究員，静岡県立大学)も、「中国系移民の複合的な「ホーム」—あるミャンマー帰国華僑女性のライフヒストリーを事例として」と題する草稿を寄せてくれたが、これについては研究会終了後メールで各共同研究員からコメントを送付した。

草稿は共同研究会開催前に提出してもらい、草稿1本あたり共同研究員2名をコメンテータとして割り当て、事前の精読をお願いした。合評会においては、執筆者による簡単な内容紹介に続き、コメンテータが議論提起をし、次いで自由討議を行った(草稿1本あたり概ね1時間ずつ)。

提出草稿のほとんどが執筆時間の制約等で未完成であり、また分量も長大なものからコンパクトなものまで様々であったが、いずれもそれらを基に議論をするには十分な質を備えたものであった。ただし、本研究会の趣旨—行為中心的アプローチにより「華人」(ないしそれに類する概念)が立ち現れる瞬間やそのプロセス、そしてそこでの「華人」なるものの意味内容やイメージを記述する—toに照らし、幾分抜本的な書き直しが必要なものもあったが、その方向性については議論の過程で十分明確なものとなった。

なお、今回合評した草稿については、今後数カ月をかけて再び各自で完成させ、相互に閲覧・コメントするプロセスを経て、近いうちに一両年中に論集として出版することを予定している。

草稿合評会とは別に、第1日目の最後に、本年度11月から本研究会にアフィリエイトしているファジャール・イブヌ・トゥファイル氏(AA研外国人研究員，インドネシア科学院)に、

“Figure of the Chinese and Urban Riots in Indonesia, 1970s-1990s”と題して研究発表をお願いした。氏の発表は、インドネシアにおけるいわゆる「反華人暴動」にまつわるナラティブの中でいかなる「華人」像が立ち現れるかを論じる、現在執筆中の同題の著書に基づくものであった。今回の報告では特に、1998年5月のジャカルタ暴動に関する「事実究明」や「目撃証言」の語りの中において、具体的に「華人」が姿を持ったものとして断片から構築される様をエピソード的に明らかにした。この報告の詳細については、以下の要旨を参照されたい。

(文責: 津田)

■「報告」の要旨

“Figure of the Chinese and Urban Riots in Indonesia, 1970s-1990s”

ファジャール・イブヌ・トゥファイル (AA 研外国人研究員)

My research project is focused on the production of social figure in the discourses of urban riots in Palu and Bandung in 1973, Ujung Pandang (Makassar) and Solo in 1980, and Jakarta and Solo in 1998. The study critically examines how the narrative and visual representations of the riots have returned to a figure of *etnik Cina* (ethnic Chinese). I suggest that the figure recounted in riot narratives and visual representations embodies an idea of a frightening, ambiguous, but at the same time desired state. The idea of the state emerges around critical events in the 1970s and 1980s when the New Order sought to consolidate its power and in 1998 when it gradually lost the power. Drawing on the argument on “sacrificial crisis” developed by Rene Girard and “critical event” by Veena Das I argue that the figure of the *etnik Cina* signifies an anxiety over collapsing differences and boundary of the “Other” within Indonesian national fold and, and at the same time also masks the inability of the state to exercise sovereign power to control and domesticate its subject.

My talk will based on a chapter of a book manuscript that I am writing on the *etnik Cina* as a social figure in the riots. The manuscript would include four major chapters. Chapter 1 discusses the theoretical perspective of the state as an idea and suggests how the perspective sheds light on the state as an important political construct and social imaginary in the time of critical events and sacrificial crisis. This chapter also addresses approaches to theorize state sovereignty through social figure. Chapter 2 describes and analyzes the riots taking place in the 1970s and 1980s. Drawing on eyewitness accounts, testimonies of people involved in the riot, and statements of government officials, the chapter examines the construction of *etnik Cina* as a “responsible” figure accused of

triggering and provoking the violence. Chapter 3 emphasizes the May 1998 riot. By analyzing the work of the investigative teams, eyewitness accounts (including my personal accounts), testimonies of Indonesian Chinese, media reports, and statements of political actors, this chapter examines the construction of *etnik Cina* as a “victim” of racial violence to analyze the figurative extension and ambiguity of state power. Chapter 4 addresses how the New Order state has unsuccessfully attempted to categorize and domesticate the Chinese as an ethnic citizen in the national fold. Then the chapter traces the discursive construction in the riots back to this elusive figure, and as the Other, it has always come to haunt the New Order’s political sovereignty. My talk will be focused on the chapter on the May 1998 riots.

(文責: ファジヤール)